



オンタリオ湖を望むトロント市。中央に見えるのがCNタワー。

タートにむけてカナダのコミュニティ計画協会がまとめた小冊子(注2)は、カナダのさまざまな都市や地域で進められている「より住みやすい」コミュニティづくりの革新的なプログラムを多く紹介していて興味深い。土地利用、交通、地域管理、環境などの計画においてユニークなアイデアをとりあげている事例をはじめとして、すぐれた住宅の供給やコミュニティの活性化など、そして社会変化に対応する教育の機会、情報やコミュニケーションなどの新しい取り組みを、写真やイラストまじりで編集、各事例ごとに事業主体とその住所、電話番号などを記してリアクションを求めている。これを見ると、カナダのあちこちで、実にさまざまな実験やデザインが行なわれていて、それらが、いかにカナダの「住みやすさ」に貢献しようとしているかがわか



ふだん暮のモントリオール

る。「住みやすさ」を求める夢や願望がまさに、コミュニティ計画のアイデアと行動力によって実っていくであろう有様を読みとれるのである。

多様性と調和

カナダでもっとも先鋭的な建築家のひとり、ジャック・タイヤモンドは、現代カナダ建築を論ずる小文(注3)の中で、カナダとアメリカとの相違を、都市や建築のあり方に触れながら指摘している。それによると、カナダの都市は、アメリカの都市のように激しい変化に出会っていないという。アメリカの場合、郊外に居住地を求めた結果、都心部が荒廃するのに対して、カナダの都市が、土地の多目的利用の形態をもつことによつて居住者≠所有者といった権利の容認が行われ、結果として、既存の建物を破壊して高層ビルを建設するような考え方に対する抵抗感を生みだし、古い建物のリサイクルが、困難を伴いながらもち取られていく実態があるとして、これを評価している。

カルガリー

CALGARY

一九八八年の冬即オリンピックが開かれるカルガリー市は、カナダにおける石油産業の中心地として、ここ二十年間に目ざましい発展をとげた。

カナダの石油・天然ガス関係企業(およそ六百五十社)の実に八六パーセントがカルガリーに本社をおき、その他の業種においてもここに本社を設ける企業がふえた。こうした盛んな企業活動を反映



トロント市の新設住宅団地

大都市で、職、住、文化のバランスある町づくりがどんな形で可能なのかを探るひとつの試みではある。

して金融機関の進出も相次ぎ、カルガリーがモントリオールを抜いてトロントに次ぐカナダ第二の金融センターになる日も近いといわれる。

当然、町の様相も一変した。一八七五年には荒野に藪がボツンとなつていただけだったカルガリーは、今や、大平原のマンハッタン、といわれるほど高層ビルの林立する近代都市に生まれ変わった。